

調査員のコラム

「さあ 大人の出番です！」

谷山子どもの権利調査員

(在籍期間：H29.4～)

30年未から頻繁に耳にする「平成最後」というフレーズから、「令和最初」のという表現を見聞きすることが多くなり、令和の時代も少しずつ浸透してきた今日この頃です。私自身は、「昭和一平成—令和」と3つの元号を経験していますが、昭和生まれにとっては、「昭和は遠くなりにつれ」という実感があります。最近、私の家の周りの公園や空き地、校庭で、放課後や休日に遊んでいる子どもたちを見かけることが少なくなりました。私の子ども時代は、道路での三角ベースや空き地での野球が遊びの中心でした。今は、空き地が少なくなったり、道路の車の量が違ったりなどの環境の変化で、一概に比較はできませんが、社会の状況や環境が、子どもたちの遊びの内容や方法などを変えてしまいました。よく言われていることですが、私自身、友達や地域の仲間とのふれあいの中での多様な経験や体験は、自分が成長するうえで、大きな比重を占めてきました。

また、最近では、加齢のせいばかりではないのですが、子ども時代のことを思い出すことが多くなりました。風呂屋での入浴のマナーや遊びの仕方など、近所のおじいさんに怒られ、怖かったことが懐かしく思い出されます。今思えば、子どもが悪さをすれば、他人の子どもであろうと叱りつけるカミナリおやしというものが、どこの町内にもいたような気がします。社会風潮や価値観のせいでも他人の子どもを叱るということが、私の周りの話題からはほとんど聞かれなくなりました。当時は、大人から怒られたことや注意をされたことは、少しおっかなかったのですが、そのことによって、いろいろ考え、行動することが多くなったような気がします。今から思えば、地域の子どものための躰役であり、子どもの健全な成長のために、子どもたちに関心を持ち、しっかりと見守ってくれていた、ありがたい大人の存在だったと思います。

過日、テレビを観ていたら、私が就職した当時に放映されていたドラマ「大草原の小さな家」が再放送されていました。舞台は、西部開拓時代のアメリカです。厳しい自然と闘いながら日々を誠実に過ごす「インガルス一家」の物語です。小さな町に暮らす人々との交流や、時に周辺と生じる衝突を通し、主人公の少女ローラの成長や家族愛を描いており、派手な演出などはありませんが、生き方や思いやり、育児など、いろいろなことを考えさせられた名作だと私は思います。その中で、父親役で、子どもたちから「父さん」という呼び方をされていたチャールズ・インガルス役のマイケル・ランドンは、私が小学校時代放映されていた「ボナンザ・カートライト兄弟」の3兄弟の末っ子役として出演されていたこともあり、この「大草原の小さな家」のドラマを親しみ深く、楽しく観ていました。残念ながら、90年代初めに亡くなりますが、新聞に「頼もしくて優しい父さん 逝く」というタイトルが出ていたことを鮮明に覚えております。

少子化、核家族化が進行している現在だからこそ、「大草原の小さな家の父さんや大人たち」のように、一人ひとりの子どもたちの周りには、子どもたちをあたたく見守り、子どもたちの健全な成長のための環境づくりに関心をはらい、積極的に行動しようとする大人の出番がたくさんあってほしいと強く思います。

アシストセンターに相談してくれる子どもたちからの姿やメールを頂くと、改めて新鮮な気持ちと身の引き締まるおもいで、子どもたちの健やかな成長を願っていかねばと強く思います。

～ある子どものメールから～

“～わたしは、アシストセンターのように、相談に乗ってくれる相談所があるという安心感と、応援されている感じがとても支えです！ありがとうございました！またなんかあったら相談させて頂いてもよろしいですか？これからもお仕事頑張ってください。応援しています！私も将来、困っている人の支えになってあげたいです！本当に有難うございました。～”

「お守りのことば」

近藤子どもの権利相談員

(在籍期間：H30.4～)

お天気の良い通勤途中、私はいつも思うのです。

「ああ。どうして今日もギリギリまで寝てしまったのか。あと30分早く起きれば…、ポーっとしなければ、愛おしい犬たちをお散歩に連れていけたではないか…」と。そして、毎度、自分を責めると同時に、思い出す言葉があります。

私は、2匹の犬を飼っています。どちらも、クリーム色のチワワです。初めて飼った犬は、チワワの中でもおそらく人気のタイプ、小柄で短足、全体的に丸っぽく、毛量も多くてフワフワのL君。大きなお目目は時にタピオカかと錯覚させるほど、黒くてまん丸です。

2匹目に迎えたMちゃんは、ダックスフンドのような胴長タイプ。手足も長く俊足、お目目はつぶらなアーモンドアイ。いつもうっすらと見える困り眉もチャームポイントです。毛並みもL君とはまた違って、顔周りにようやく生えてきた飾り毛が、まるでウーパールーパーのようです。そして、体重はL君の倍近く、4キロほどあるデカチワワです。同じ犬種と毛色といっても、これほど特徴が違うふたり。親せきや子どもたちからは、いつもL君人気。“じゃあ、MちゃんもL君のような見た目だったら良かったのか…?”と思うと、それではMちゃんではなくなってしまいます。Mちゃんは、Mちゃんだから可愛くて、Mちゃんならではの良さがあります。みんな違って、みんないい。とは、まさにこのことです。

そのふたりは、日中、留守番をさせることになります。“留守中は少しでもぐっすり寝てほしい。だからその前にお散歩に行き、一緒にお日様を浴びて、外の空気、いろいろな匂いを嗅いで、リフレッシュしてほしい”という思いが常にあるのですが、なかなかお散歩に連れて行けない日が続いたことがありました。私もよっぽど気にしていたのでしょう。ふたりが小さい頃からお世話になっているトリマーさんに会った時、「最近、雪も溶けて暖かくなってきたのに、あまり散歩に連れて行けていなくて…」と、相談している自分がいました。

すると、トリマーさん。

「ワンちゃんにとって一番幸せなのは、飼い主と一緒にいることではないですか」とケロッとした表情をして即答したのです。続けて、「お散歩は、毎日でなくて良いのですよ。むしろ、雪解け後の春先は、汚れや埃が舞って、空気も良くないから、あまりオススメできません。」と言って、近くで聞いていた別のトリマーさんと動物看護師さんも頷いていました。

その言葉に、私はどれだけ救われたことでしょうか。お陰で、私の気持ちもずい分と楽になり、お散歩に固執せずに別の方法を考えられるようになりました。そして、通勤途中に後悔の念が押し寄せても、トリマーさんからいただいたお守り言葉を思い出して、自分をなだめるようになりました。とはいえ、今年はまだ少し、早起きをがんばりたいところです。

コラムを書きながら、“私も相談をしてくれた方のお守りになるような言葉を返せているのだろうか…”と思い返しました。お互いに顔の見えない電話やメール、面談でお会いできても限られた情報と時間の中で、どれだけ相談者さんに寄り添うことが出来ているか…。相談者さんの求めているような、お守りになるほどの言葉は返せなくても、「話せて良かった」、「また相談してみたい」とほんの少しでも思っただけのように、これからも耳を傾けていきたいです。

「憧れの人」

澤谷子どもの権利相談員

(在籍期間：H31.4～)

私には、憧れの人があります。男子フィギュアスケートの羽生結弦選手です。

2014年11月、シーズン初戦となる中国杯、フリースケーティング前の6分間練習で、羽生選手は中国の選手と衝突事故を起こしました。それにより、羽生選手は頭部と顎に怪我を負ってしまいました。私は、「怪我してるんだから欠場したら良いのに！」と信じられない気持ちになりながら、彼のその後の演技を見ていたことを今でも鮮明に覚えています。羽生選手は、見事銀メダルを獲得しました。

元々素晴らしい選手だとは思っていましたが、怪我を押して演技をするその姿を見てから、私の活躍から目が離せなくなってしまいました。

相談を受けていると、子どもたちに対して「そんなに無理しなくて良いのにな」「もっと力を抜いて、頑張らなくても良いのにな」と感じる場合があります。少しでも楽になってほしいという思いから、そのように伝えることもあります。

でも、「自分だったらどうだろう？」と考えると、必ずしもその声掛けをポジティブに捉えられるとは限らないのではないかと思います。

私は、基本的にあまり頑張りません。頑張らないといけない時は頑張るし多少の無理もするけれど、自分の心と体を第一に考えています。やりたくない時はやらない、でも余裕のある時には少しやっておこう、くらいの気楽な姿勢で日々を過ごしています。

だけどそんな私も、羽生選手の姿を見てると、自分の目標に向けてストイックに頑張るのはとても格好良いことだと感じます。我ながら単純だとは思いますが、彼の演技を見た後は、「よし、頑張ろう！」と気合が入ります。「羽生選手のような格好良い人間になりたい」という憧れの気持ちなのだなあと思っています。

そんな時に、「無理しなくて良いのにな」「頑張らなくても良いのにな」と言われると、私はやる気を削がれたような気持ちになるんじゃないかな？と、ふと考えました。一般的に、「頑張っている人に頑張れと声を掛けてはいけない」と言われていますが、それでは、「頑張らなくて良いんだよ」という言葉が、頑張っている人に掛けるべき言葉なのではないでしょうか？

私が頑張ることがあるとすれば、それは「私が頑張りたいから」頑張ることです。憧れの彼のように、人一倍欲張りで、ストイックな自分になりたいと思って頑張っているのです。そんな時は「頑張らなくて良いのにな」なんて言われたくないから、子どもたちにも、安易にその言葉を言わない人でありたいと考えるようになりました。

「頑張りたい気持ち」も「頑張りがたくない気持ち」も、人それぞれ。頑張りたい人のやる気を減らしたくないし、頑張りがたくない人を責めたくもありません。「自分はどうしたいのか？」って、考えれば考えるほど分からなくなってしまうものだと思うから、一緒に考えられる大人として寄り添うことが、今の私の目標です。

きっと今この瞬間も、羽生選手はストイックに頑張っているのだと思うから、私も彼に少しでも近付けるように頑張りたいと思います。